

教育課程の体系化を先取りした、広島大学「到達目標型教育プログラム」

河合塾が発行している情報誌『ガイドライン』では、2007年11月号の特集2「大学までの教育で何を身につけるのか」で、広島大学の「到達目標型教育プログラム」を取材した。この取り組みは、2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて（答申）」で提言されている教育課程の体系化を先取りしたものだ。

今回、追加取材を行い、各主専攻プログラムの評価項目と授業科目との関係、学生の到達度の評価方法などについて、話をうかがった。

卒業生の質の保証を目指す教育プログラム

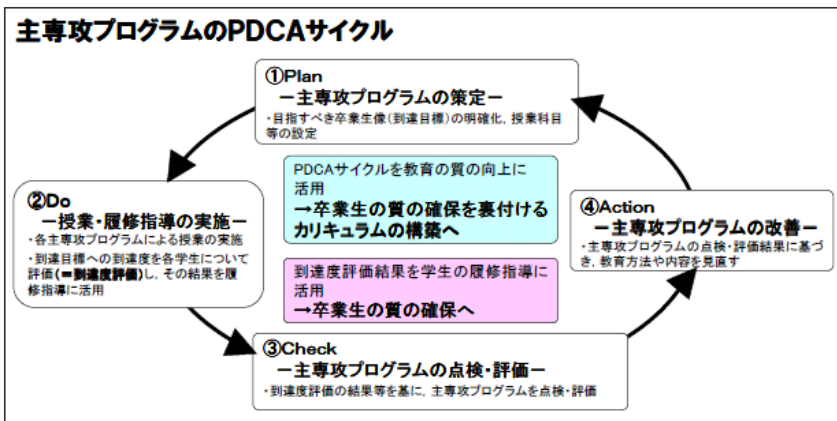
2006年度から広島大学で実施している「到達目標型教育プログラム HiPROSPECTS[®]（ハイプロスペクツ）」は、学生に求める能力や到達目標を明確にし、それを身に付けた卒業生を社会に輩出することを目的とした教育プログラムである。

学生は、必ず1つの主専攻プログラムを履修し、学位を取得する。広島大学では、PDCA サイクル【図1】を用いて、主専攻プログラムにおける卒業生の質の確保、およびその質の確保を裏付けるカリキュラムの構築を実現させようとしている。

Plan では主専攻プログラムの策定を行う。策定のため、主専攻プログラム担当教員会を組織。担当教員会にはプログラムで授業をする教員が参加する。担当教員会ではプログラムの到達目標の設定と到達目標の評価項目（チェック項目）、評価項目を測定する授業内容、実施体制などを検討し、点検・評価や改善にも責任を持つ。つまり、PDCAすべての過程にかかわる組織である。プログラムの設計図は、「主専攻プログラム詳

【図1】主専攻プログラムのPDCA サイクル

*広島大学ホームページ「HiPROSPECTS(R)広報用資料」より



【図2】評価項目およびそれを測定する授業科目について

*広島大学ホームページ「HiPROSPECTS(R)広報用資料」より

評価項目	O知識・理解			左記項目を評価する授業科目
	非常に優れている (Best)	優れている (Modal)	基準に達している (Threshold)	
1) OO学校とその教育に関する基本的な理解ができています	理解を十分もっており、それらの理解にもとづいてOOやMMの問題点と課題を指摘し、改善案を示すことができます	理解をもっており、それらの理解にもとづいてOOやMMの問題点や課題を指摘することができます	理解ができています	OO学概論 △△学 ...
2) OO期の子どもたちに関する基礎的な理解ができています	理解を十分もっており、それらの理解にもとづいてOO期のMMの問題点と課題を指摘し、改善案を示すことができます	理解をもっており、それらの理解にもとづいてOO期のMMの問題点や課題を指摘することができます	理解ができています	OO学概論 △△学演習 ◇◇学 ...
3) OO...	OO...	OO...	OO...	OO学概論 ...
O知的能力・技能				
評価項目	非常に優れている (Best)	優れている (Modal)	基準に達している (Threshold)	左記項目を評価する授業科目

述書」としてまとめられ、学内で学生にも公開されている。

1つのプログラムを4つのカテゴリーに分け約20の評価項目を設定

評価項目とそれを測定する授業科目は【図2】のような関係になっている。評価項目は、大きく「知識・理解」「知的能力・技能」「実践的能力・技能」「総合的能力・技能」の4つのカテゴリーに分けられ、さらにカテゴリーごとに詳細な評価項目を設定している。

分類ごとの評価項目数は各プログラムによって異なるが、大体4～5つ並ぶことが多いようだ。つまり、1つの主専攻プログラムには約20の評価項目が含まれる。各授業科目に、到達度に関する評価項目が埋めこまれており、各授業でその知識・能力・技能の到達度合いがチェックされることになる。なお、各評価項目は、「非常に優れている」「優れている」「基準に達している」「基準に達していない」という4段階で評価される。

ところで、到達目標型教育プログラムは、今までの学部教育と何が違うのだろうか。教育室教務グループの森川敏昭主査は、次のように説明する。

「最も異なるのはDoにあたる学生への評価です。従来の『秀、優、良、可、不可』という授業の成績評価だけでなく、到達目標に基づき、学生にどのような能力が身に付いたのかを説明します。もちろん、不十分だった点も指摘します。

もう1つはPlanで設計した内容に基づき教員が授業を行う点です。教員に授業がはりつくプログラムから、授業に教員がはりつくプログラムへの転換を意味します。つまり、

ご自身の専門を語るという授業から、到達目標に基づいた授業へ、また、教員が代わった場合でも同じ内容・同じ能力を身に付けるための授業を行うということです」

**各授業における到達度評価を数値化し
参考平均値をもとにチューターが評価を決定**

次に、科目ごとの到達度評価を、どのようにしてプログラムとしての評価にしているのか、見てみよう。

「広島大学にはチューターと呼ばれる教員がいて、授業ごとの到達度評価を集計し、評価項目ごとの評価結果を導き出します。例えば、【図3】のように評価項目01について、到達度評価を数値化し、平均を求めます。担当教員会にて、評価項目01の到達度の目安となる参考平均値を決めていますので、それに基づいてチューターが評価を決めます。

広島大学では、学生は自分の到達度評価・成績評価を、インターネットを利用した学生情報システム（もみじ）で見ることができます。ただし、学生はチューターと面談しないと成績を見ることができない仕組みですので、チューターは必ず口頭で到達度について説明できるようになっているのです」（森川主査）

このような学生の到達度評価と共に、プログラム自体のCheckとActionも実施している。担当教員会は、学生の到達度評価の分析結果を基に、教育方法や内容を見直し、次年度以降の入学生のカリキュラム策定に反映させている。さらに、毎年、プログラムの評価を

年次報告書にまとめ、それを全学の評価委員会がチェックする仕組みになっている。

**学生への認知度アップと
企業や社会の受け取り方が今後の課題**

このように広島大学では、学士課程教育をプログラム化する取り組みを行っているが、課題もある。

1つは、自大学の学生や広島大学を希望する受験生に対する認知度を上げることと、これらの取り組みの意義を理解してもらうことだ。

「まだ卒業要件と直接結びついているわけではないので学生はその必要性を認識しておらず、授業科目の選択の際、単位が取りやすいか否かに目が向いているようです（笑）。今後は到達度評価が行われている背景・理由も含めて、学生や受験生に浸透させたいと考えています」（森川主査）

もう1つは、この取り組みがどのように企業や社会に受け入れられ、評価されるかだ。このプログラムの1期生は現在3年生で、成績証明書のように、到達度評価を証明書として発行するかは検討中だという。「学内でも到達度評価を証明書として発行する話が出ていますが、現時点では、学生の育成に重点を置いています」（森川主査）

この点について同大が慎重なのは、卒業要件は単位の取得であり、目標への到達度は必ずしも求められていないからだ。学生が有している能力を到達度として具体的に証明することによって、逆に学生が就職活動中に不利益を被ることも懸念される。

さらに、質の保証の面では、単位の取得と教育プログラムの評価を関連させていく必要がある。基準に達しない評価項目があるのに、単位は取得できたので卒業できることが生じないようにするためだ。しかし、1つの授業が複数の評価項目にまたがっている場合もあるため、関連づけは容易ではない。

以上、広島大学は他の大学に先駆けて学士課程教育の改革に取り組んでいる。「学生の質や学位の質の面で、今後ますます十分な能力を身に付けた学生を社会に輩出することが大学に求められます。最低限何を保証するのか、各大学が責任を持って教育しなければならない」（教室教育企画グループ清水秀夫グループリーダー）という考えのもと、さらにこのプログラムの充実を図っていく予定である。

【図3】学生情報システム 画面イメージ図

*広島大学ホームページ「HiPROSPECTS(R)広報用資料」より

